

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 片桐 準二

論文題目 文脈アプローチによる言語学習ビリーフの
形成・変容過程の質的研究

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	村上 京子
委 員	名古屋大学教授	衣川 隆生
委 員	名古屋大学准教授	初鹿野阿れ

本論文は、日本語教育において構成主義的考え方が国内外の教室に広がりつつある今日、学習者のもつ言語学習・習得に関するビリーフがどのように変化、形成されていくのか、その過程を文脈アプローチを用いて、質的に調査分析したものである。以下、本論文の概要と評価結果を報告する。

[本論文の概要]

1980年代後半から日本国内外の日本語学習者の量的増加および多様化傾向の拡大が進み、教育パラダイムの変換も繰り返されている。教師主導型で学習者が受身的な立場で学習する教育から、学習者を中心においた教育への変換が1980年代半ばに起こっている。これが第1のパラダイム・シフトである。教授法で言えば、言語の形式を重視するオーディオリンガル・メソッドから学習者の言語運用に主眼を置いたコミュニカティブ・アプローチへと移り変わった。その後、コミュニケーションと学習者のニーズを重視する考え方から、社会構成員として学習者をみていく構成主義的教育への第2のパラダイム・シフトが1990年代半ばに始まった。このような教育の考え方の移行にともない、教育現場でも「学習者中心」から「学習者主体」への転換、すなわち自律学習や協働学習を重視する活動へと移ってきている。本研究は、この転換期に学習者のもつビリーフがどのように変容したり、新しいビリーフを形成したりするのかを実証的に調べ、今後の日本語教育に生かしていこうとするものである。

第1章では、第2言語学習に関してビリーフ研究を概観している。1950年代から社会心理学の分野で始まった動機づけや態度に関する研究に影響を受け、ビリーフを調査するための質問紙を用いた研究が始まった(Horwitz:1985, 1987)。その後、この質問紙調査(BALLI)を中心に数多くの学習者ビリーフと教師ビリーフ間の齟齬を対象にした研究が行われた。また、BALLIのような質問紙を使った量的研究の他に、学習者からの口頭による報告資料をもとに、そこに含まれる言語学習について語るメタ認知的な知識を取り出す研究も行われている(Wenden: 1986, 1987)。このように始まったビリーフ研究はその後さらに広がりを見せ、様々な研究成果が積み上げられた。これらを大きく規範アプローチ、メタ認知アプローチ、文脈アプローチの3つに分類し、それぞれの基盤とする考え方を解説している。

第2章では、日本語教育における学習ビリーフ研究を概観し、ビリーフという語を定義している。日本語教育における学習ビリーフ研究は1990年ごろ始まり、その多くは上記のhorwitz(1987)やWenden(1987)の影響を受けている。学習者のもつビリーフの国や文化間の比較研究や学習者と教師などの比較、学習ストラテジーとの関係、自律学習との関係、漢字や文法など特定の学習活動と関連するビリーフの研究など多岐にわたるが、特に学習者のビリーフ変容を扱った研究を詳しく紹介している。これらの研究から、介入や特定の学習文脈を経験することで学習者のビリーフは変容することがわかる。これらを踏まえ、本研究では文脈アプローチによる学習ビリーフの実践研究を行うことを前提に、ビリーフの定義を「ビリーフは言語学習に関わる考え、意見、態度であり、かつ動的なもので社会的相互作用によって形成された

り変化したりし、文脈によって特定されるものである」としている。

第3章では、本研究の研究方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (MGTA) を用いることの理由とその特性、条件、手順などが述べられている。

第4章は、学習者主体を目指した作文授業導入による学習者のビリーフの形成・変容の過程をみる目的で行われた実践活動が紹介されている。授業はタイにある大学で週1回150分の作文授業が15回行われた。授業目的を「作家になって読者を意識した作文が書けるようになること」とし、ピア活動を中心に、作文の自己評価、作家ノートの自己評価、代表作文の朗読に対する学習者同士の相互評価が取り入れられている。授業開始後10週以降から最終発表にかけて受講生に対してタイ語による半構造的インタビューが行われ、その文字化資料と作家ノートの自己評価、相互評価についての感想文が分析資料として使われた。

その結果、25の概念とその概念をまとめた7のカテゴリーが得られた。これを図化し、この授業を受講したことによる学習者のビリーフの形成・変容過程を記述している。学習者は初めにオーディオリンガル・メソッドに見られるような客観主義の教師主導型ビリーフをもって授業に臨むが、「ピアとの話し合い活動の体験」や「評価活動の体験」「作文作成プロセスの体験」の3つの体験が契機となって「自己の振り返り」を導き、自律的で協働的な学習と内容重視の新たなビリーフを芽生えさせることがわかった。しかし、一方で評価活動やピア活動での困難な体験が「維持される初めのビリーフ」への往還現象を生じさせていることもわかった。この場合、活動の改善や効果的な教師の支援が、学習者主体のビリーフ形成に今後導く可能性があることが述べられている。

第5章では、自律学習支援の道具としてポートフォリオを取り入れた1回2時間、週2回10週間、計40時間の授業を行い、ポートフォリオに対する態度変容からビリーフの形成・変容過程を分析している。やはりここでも受講生に半構造的インタビューを行い、その文字化資料をもとに分析を行っている。この授業実践の中で、受講生の中にはコース開始時の「教師サポート」を受けてポートフォリオ先駆者になるものがあり、そのあとに他の受講生から「先駆者の存在」として認知されるようになる。多くの受講者は「教師サポート」を受けて「日々の振り返りシート」の役立ち感を感じるが、「指示されたものを入れる」ことだけをし、ポートフォリオの「必要性への疑問」を感じ、「やり方も分からない」と思って「消極的態度」をもつ。それでも学習が進むにつれて「学習動機を高める文字習得」と「ポートフォリオ先駆者の存在」が促進剤として働き始め、「他者からの刺激」を受けるなどして「活用への気付き」が起き「積極的取り組み」に至ることがわかった。しかし、なお一方で、「消極的態度」のままで「進まない取り組み」で終わってしまう場合もあることがわかった。

この2つの実践研究を通して、ビリーフの変容は自己の振り返りによって起こっていることがわかった。つまり「自己の振り返り」の機会を設けることがビリーフ変容を促すと言える。ただし、「自己の振り返り」の機会の前段階として、振り返りを引き起こす体験をさせる仕組みが必要で、第4章の作文授業では「作家になる」という設定で作文を作成するために行った

他者と共有するピア活動や相互評価などの活動であり、第5章ではポートフォリオ作成を通して他者と共有する「振り返りセッション」活動がそれにあたり、このような活動は非常に重要である。

終章の全体のまとめの考察では、学習者主体を目指して授業デザインをしたり、自律学習支援としてポートフォリオを導入したりすることの意義が述べられている。これは単に活動そのものではなく、その活動を通して、またその振り返りを通して、学習者が自律した主体となって学ぶように導くもので、その方向へのビリーフの変容がおこり、そうした自立した考え方についての「学び」が起こることを意味していると述べられている。一方、同時に文脈アプローチによる本研究では、ビリーフ変容が起こらない場合についても取り上げられており、この点は従来の先行研究とは大きく異なるところである。また、ビリーフ変容をもたらす要因の分析として、ポートフォリオのような道具が学習者の振り返りを促す起爆剤となることをアフォーダンスという用語を使って説明している。すなわち、学習者と学習環境の相互関係の中で、環境が提供する学習の意味や、環境が持つ潜在能力が相互作用を起こすという生態学的アプローチをひいて考察している。

[本論文の評価]

この研究は、日本語教育の多様化に対応したもので、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによりビリーフの形成・変容過程を丁寧に示したものである。本研究の成果としては学習者主体の「学び」を社会的な「仕組み」の問題として捉える方向性を示しているといえる。

審査では、本論文がきわめて緻密な先行研究のもとに計画され、豊富な教育経験に裏打ちされた本格的な実践研究で、説得力のある優れた研究であると評価された。構成主義的考え方が日本語教育に提唱されるようになって20年近くなるが、未だ十分な理解と実践が広まっていない今日、本研究はたいへん時を得た意味のあるものと言える。第4章で述べられているように、はじめは学習者から客観主義的教育に基づく発言が多く見られたが、学習者主体の授業実践の中で次第に協働活動の良さに気づき、また振り返りを通してビリーフを変化させていく様子が、インタビュー資料をMDTAに基づいて分析していく中でみごとに描き出されていった。形成・変容の過程と同時に、ビリーフが変化しないケースの要因分析も行われている点も、従来にない評価に値する点だといえる。質疑ではこの方法論に関する質問が出され、また用語などに対する確認が行われた。また、学習者のビリーフだけではなく、教師のビリーフも取り上げられるべきではないのかといった意見や言語化行為がビリーフ変容に及ぼす影響に対する問いも出されたが、論文作成者から今後の研究の方向性に対する答弁がなされ、多様化する日本語教育の中で文脈アプローチに基づく研究の意義やこのような質的研究の蓄積による理論の精緻化に関する見識が示された。

以上の評価から、審査員は全員一致して、本論文が非常に高い質をもつ論文であり、博士學位論文として十分にその水準に達していると判断した。